

絶えざる流れに沿つて

——倉橋先生を偲びつつ——



森田宗一

(+) 人生の温度を高める

「彼はただそこにいるだけで、人生の温度を高める人だった」これは、イギリスの作家チャエスターントンの人柄について、ある人が書いている言葉である。とくに冷えこみやすいこの地上の人の世を少しでも温める。何という大切な事柄だろうと思う。そしてたしかにそういう人が少ないながらいるものだ。倉橋惣二先生もそんなお人柄の方だったという気がする。「人生の温度を高める人」という言葉で、私が思い浮べるいくつたりかの故人の一人は、たしかに倉橋先生だし、先生の人格やこの地上に残された足跡を表現するのに、この言葉が一番ふさわしいように思われる。

また先生のなされたお話にも、書かれた文章にも、そのことが適切にあてはまるように思われる。次に掲げるのは、先生の名著「育ての心」の中の一文である。

「子どもの目——いつも真正面から、真直ぐに相手を見る目。いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのない目。いつも一ぱいに見開いて、しっかり物そのものを見詰める目。いつも新鮮さに冴えて興味の心に輝く目。いつも柔いなつかしい意味に満っている目。人の心の明るさを受けて明るく、自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目。それよりも尚、なんという清さに澄んでいることぞ。曇りもなく、濁りもなく、たとえば比頃の澄んだ空の清さを、そのまま人界に落し来ったような目。それが子どもの目である」

「小さき太陽——よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。明るさを頌ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てある。見よ、その傍に立つ子どもらの顔の、ききとして輝き映ゆるを。なごやかなる生の幸福感を受け充ち溢ふれているを。

不徳自ら恥ず。短才自ら悲しむ。しかも今日直に如何んともし難い。ただ、愚かなる不満と驕れる不平とを捨てることは、今日直ぐ必ず心がけなければならない。然らずんば、子どもの傍にあるべき最も本質的なるものを失くのである。希くは、子どもらのために小さき太陽たらんことを」

この文章だけでも、先生の御人柄を偲ぶよすがとなる。子どもを愛し、そのひとみの中に見る子どもの本性を限りなく尊み、その子どもをはぐくみ育てることに、限りない喜びを感じ、たえず温かい力づけを与へ、その育ちゆく生命の前に驚くほど謙虚であつた先生。子どもを通じて人生の温度を高める人だったといえ、だれでもうなげることではないだろうか。

私は一高から大学へかけての頃、それは今から三十年近くも前のことであるが、ときどき先生にお目にかかる機会に恵まれ、忘れがたい感銘をうけた。私の親しくしていた先輩が愛育研究所に勤めていた関係もあって、学生であった私はときどき同所で先生にお目に

かかり、いつも変らぬ温顔との静かな口調に、心安らぐものを感じたことである。

今日でいう「母親学級」のはしりとでもいうべきだろうか、お母さんたちの集りで、子どもの見方、あつかい方について、じゅんじゅんと語りかけておられる姿は、いつまでも目に残っている。語られる言葉がそのまま美しい文章になるよう、言葉をつましく惜しんでつかわるのが印象的であった。私は、「和顔愛語」というたしか道元禅師の深い言葉の証しき、倉橋先生において見たように思つたのである。

またあるとき「君、うちへ遊びにきたまえ」というお誘いに甘えて、中野の御自宅を訪ねたことがある。生け垣をめぐらした庭で、草花の手入れをなさつておられたが、その姿は袴のようなモンベのようなものを見た村夫子然とした姿で、いかにも先生の人柄の一面をあらわしているように見え、これも先生らしい忘れがたい印象で、今でもありありと思い浮べることができる。

お宅を訪ねた際、どんなお話をうかがつたのか今は記憶していないが、子どもとはまことにすばらしいもの、どんな子でもその子ならではのたまものがある。そのたまものをはぐくみ育てなければならぬ。そんなような話に花をさかせ、その宵も心温められて帰つたように思う。

その頃の私は、自分の一生を子どもたちのためにささげたいと念

願していたが、普通の子どもの育成、教育の道をとろうか、いわゆ

る問題児と呼ばれる少年少女の仲間に道を選ぼうか、いささか

迷っていた。私は先生にそんなこともお話ししたことだろうが、はつきり記憶に残っていないし、そのことについて先生から何かアドバイスをいただいたのかもしれないが、それもはつきりおぼえていない。

私はその後、前者の道ともつきず離れずではあるが、むしろいわばはみ出す子ども、はみ足りない子どもに愛情と関心を深くし、問題兎非行少年の仕事に専念することになった。どんなにゆがんだ暗い人間の一面を見せている子どもでも、明暗の転機は紙一重である。おのがじしたまものをもつ「光の子」として変りうるものである。たくさん臨床の事実によって、そのことを学ばせられたことである。そして窮屈には「このいと小さき者の一人に為したるは、即ち我に為したるなり」という聖書の言葉に帰するもののようにである。このことにおいては、どんな子どもを相手とする仕事においても全く同じであると思う。

この点において倉橋先生の窮屈の御心境もそうであつたにちがいないのである。

(二) 保育の道と心

さて倉橋先生は、日本における保育学あるいは児童学の大先輩であり、先覚者と申すべき方であると思う。先生によつて耕やされた大地の上に、學問的にも実践的にも、花咲き実のり、その後の展開發展があつたといつてよい。

私の知る限りのこの道の第一人者の方がたの中には、何らかの意味で、先生と縁を持たれている人が多く、先生の息がかかっている方が少なくないことも、そのことを示している。また私はこの十数年来、全国各地で母親学級とか保育大会、幼児教育の集いなどに招かれて話をさせられる機会が多かつたが、そういう際よく倉橋先生のお弟子さんとか、先生に導かれて幼児教育の道に専心したという方に会うことがあつたのである。私自身は、前にのべたように先生と全く個人的にわずかの出会いを経験させていただいたに過ぎず、弟子と名のるにふさわしい者ではない。しかし、何かそういう方がたに親近感をおぼえるとともに、先生の残された感化と与えられた影響が、いかに大きいものであつたかを感じさせられることが屢々であった。

先生の耕された土壌ときり開かれた道に展開されたその後のわが

国の保育学の著しい特徴は、科学化と技術化ということであると思う。それは倉橋先生御自身がすでにその提唱者であり、旧来の情緒的センチメンタリズムからの脱出であった。それは必然的ななりゆきであり、この道に努力されてきた人々の貴重な仕事であつた。そのための努力の実りと成果も少なくなかつたといつてよい。また更にこの道を一層深く広くおし進めてゆくことが、今日の一つの課題であることも確かであろう。

しかし今日の保育学特に保育や幼児教育の実際は、はたして真的科学化や保育の道筋に沿つているのであるか。科学化と技術化の名の下に、保育する者が視野のせまいところをゆきつ戻りつし、まことに「人間の科学」の道を謙虚にしかも力強く進んでいるとは思えない。即ち育ての心が乏しく、育てる者の精神と姿勢がしつかりしていないのではないか。むしろはつきりいえば、子どもとは何ぞや、人間とは何かという根本に立つての人間育成の方法はゆがまされているのである。子どもはすばらしい生命をもち、肉体と精神（人格）との微妙複雑な結合による不思議なものであることを尊重すべきものである。そういうあたりまえなことをもう一度再確認し、しつかりした人間観につつことを忘れてはいるのではないかと思われる。

そのことなしには科学化といつても真の「人間の科学」たり得

ず、技術化は単なる小細工のテクニックとなり、かえって人間育成を誤り、保育の大道からはずれることになる。人間そのものを愛惜する心なく人間の哲学なしに、まことの保育学や生きた保育の方法があり得べしとは思われない。

生命を畏れ尊重する、生きるもの限りなく愛する。そのことが人間を育て人間の問題を考える際の出発点であると思う。何よりも人間の生命を尊重し、その力を信ずること、生命と人格の前に敬虔な心をもつ者だけが、人を育て、教育し、人間の問題を扱う資格があるといえるのである。

ところが、わが国ではその根本のことが忘れられ、怖るべき生命軽視人間無視の風潮である。まず驚くべき胎児という人間の生命抹殺（妊娠中絶・堕胎）の無難作な実行、怖れを知らぬ心である。またさうに生まれいでた人間の生命の力、人間性そのものを信ずることのできない親や保育者によって、どんなに子どもがゆがまされていることか。

育つものの心を知り、育てる者の心を正すことが、育児教育の始めでなくてはならない。子どもが本来もつている力とその心を知らず、まるで粘土細工か箱庭の草花でもあるかのようにいじくりまわし、あるいは過保護にかまいますぎ、わざわざ子どもをひ弱にしていふ親・保育者が多い。子どもを見る目が甘く浅いのである。小児

科、育児相談、ノイローゼ、非行などの臨床の事実が、たえず訴え
教えているところである。この頃の心身の虚弱児、又適応児の多く
は、いわばつくられたもやしのような問題児人工虚弱児である。そ

ういう息ぎれのする狭い保育者の眼を改め、子どもを見る目を再発
見することにより、子どもが生まれ変わったように明るい活力をもつ
てくるのである。そういう事実も少なくない。

子どもは自ら生きぬき、成長し風雪に耐えていく生命力と創造力を
をもつてゐるのであるから、その力を尊重し、開発し更に陶冶して
いく。その道を備えること。それが今日最も要請されていることで
あり、そもそも人間への愛と教育の始めといふべきである。

まことに人間を育てる仕事は、技術の末のことでなく、生命と生
命のリズムの通い火花を発する触れ合いである。そのことは、育つ
心を知り育てる心を再発見するところにのみ可能であると思う。そ
れは大河の流れのように、尽きず渴れず、流れ絶えざるものではあ
るまい。その絶えざる流れの中にこそ、おのずから時と処と情勢
により必要な方法と技術が生まれかつ活かされるのである。

保育の道も、ここに安定した土台の上に前進することができる
ものと思う。

(二) む　す　び

倉橋惣三先生の十年祭に当り、先生の面影を偲びつつ、日頃痛感
していることを述べさせていただいた。

先生の靈前に「育ての心」を改めて再確認し、この道を更に力強
く進むことをお誓いしたいと思う。そして御靈前に獻ぐべき花束に
代えて、子どもに関する正月から秋へかけての拙句を記して、この
稿を結ぶことにしたい。

罪にもろき性さを審きて初仕事

芹叢に子蟹遊びて日脚伸ぶ

春愁やわが性に似て子のしぐさ

背に眠る子の風車まわり出し

母と子と十六夜日記読む春灯

子には子の祈ることあり聖母祭

夕焼に盲児輪となりて歌いおり

鍵つ子の友も鍵つ子夕焼くる

母子寮の灯ともす窓や秋の声